

デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の比較

—教育と生活の関係を中心に—

学校教育開発学コース 李

春

A Comparative Study Between John Dewey's Lectures and William Heard Kilpartrick's
Lectures in China: Focusing on the Relation of Education and Life

Chun LI

The purpose of this paper is to consider the differences between John Dewey's lectures held in China from May 1919 to July 1921 and William Heard Kilpartrick's lectures held in China in 1927. Dewey and Kilpartrick had the same subjects on the lecture, but differed in the contents. The greatest difference in the contents between them is the relation between education and life. Dewey insisted on the role of school education to link it with the everyday life in the society, and Kilpartrick insisted that the school education is the everyday life itself. But some people misinterpret the differences of their claims.

目 次

はじめに

1. デューイとキルパトリックの中国教育に対する問題意識
2. デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の視点
3. デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の共通点と相違点
4. 教育と生活の関係に関する論述の違い

終わりに

はじめに

中国においては長年にわたり、「教育即生活」という言説がデューイ訪中講演の中核的な思想の一つであるとして批判されてきている。ある研究者は、「デューイは『教育は生活の準備ではない』、『教育即生活』を主張している。この主張の意味は、人々を現在の生活に満足させ適応させ改造させないということである」と述べている¹⁾。

しかし、デューイ訪中講演の原稿を調べた結果、デューイは、訪中講演で「教育即生活」という言説を提

出していない。しかも、彼は、子どもを現在の生活に適応させるのではなく、未来の生活を創造するために学習を展開することを主張していたのである。デューイがこの観点を提唱していないにもかかわらず、「教育即生活」という言説はなぜデューイの主張とされ、1920年代からスローガンになって全国範囲に普及していったのか。

この問題を解明するための重要な作業は、「教育即生活」というスローガンがいったいつから中国で使われ始めたかをはっきりさせることである。筆者による調査の結果、「教育即生活」は、1919年から1921年のデューイ訪中後にすぐに流行したのではなく、1927年以後に中国で広まったことがわかった。前例のないほど巨大な影響を中国に与え、数多くの熱狂的な崇拜者を呼んだデューイ訪中講演が、「教育即生活」をデューイ訪中講演の中核的な主張にしたとすれば、それは、デューイ訪中直後にスローガンになるべきである。しかし、なぜデューイ訪中直後ではなく、1927年から流行し始めたのか。この謎を解く鍵になる人物がいる。その人物とは、1927年3月に中国を訪れたデューイの教え子キルパトリックである。

1927年3月4日、デューイ理論の継承者と解釈者と思われるキルパトリックは、中華教育改進社の要請を受けて中国を訪問した。彼は、広東省から上陸、そして、当

時の中国の四大都市広州、上海、南京、北京を歴訪し、1927年5月30日、北京を離れ帰国した。この2ヶ月間の訪中においてキルパトリックは、上海で10回、北京で9回の講演を行い、そして上海で3回、北京で2回の中国教育問題討論会を開いた。また、陶行知が創設した「曉荘師範学校」を視察し、そこで「私の曉荘師範に対する感想」²⁾という有名な講演を行った。

キルパトリック訪中講演の中国語原稿を調べた結果、その原稿には、「教育即生活」、「教育は生活である」という主張がはっきりと残されていた。つまり、「教育即生活」は、デューイの主張ではなく、キルパトリックの主張であり、中国の教育者たちは、キルパトリックの主張をデューイの主張と混同していたと考えられるのである。さらに、キルパトリックが提唱した「教育即生活」という主張における「教育」とは、都会の「一般教育」ではなく、「中国の農村教育」を指していることも明らかになった³⁾。すなわち、中国の教育者たちは、中国の農村教育に向けて提出された「教育即生活」の思想を一般教育論へと拡大し普遍化し、さらに再生産していったのである。

デューイ訪中については、すでに多くの研究で知られているが、キルパトリック訪中に関してはあまり研究されておらず、デューイ訪中とキルパトリック訪中の比較はこれまで見落とされてきた論点である。本研究では、デューイとキルパトリックの中国に対する問題意識の分析、中国の教育問題を解決するために行われた訪中講演の主要な内容の比較、さらに教育と生活の関係についての論述の違いに問題を絞って、デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の異同を明らかにすることを通じて、中国教育改革者としてのデューイとキルパトリックの理論的理解と、それに対する誤解の構造を解明することを課題としている。

1. デューイとキルパトリックの中国教育に対する問題意識

デューイとキルパトリックの中国教育に対する問題意識を究明するには、まず最初にデューイとキルパトリックの訪中目的を分析しなければならない。

デューイの場合、当初は訪中する意向がなかった。彼のアジアの旅の目的地は日本であった。日本をアジアの民主主義教育の拠点にしようと考えたデューイは、日本の社会と教育の現状に失望し、胡適、陶行知などの中国人の教え子たちの要請に応じ、訪日の緊張感を緩和する旅として中国を訪問することにしたのである。しかし、当時の中国の教育者と学生たちは、「民主と科学」の旗

印の下に、民主主義と科学主義を满腔の熱意で求めていた。それに震撼させられたデューイは、訪中の目的を変更し、中国の教育を民主主義の道に導くように働きかけるようになった⁴⁾。しかしデューイは、中国教育を民主的に発展させるために、当時の中国には大きな障害物が存在していたと思った。それは、「専制性」である。「中国の教育は実に専制的な教育である。学校のすべては上司に決定され、教師の教授法は学校に決定され、生徒の学習は教師に決定される。教室、教師、教材、教授法はすべて固定され画一的である。……日本を模倣したこの教育を変革しなければ、中国は必ず専制主義教育が横行する日本の後塵を拝することになる」とデューイは指摘した⁵⁾。したがって、中国の教育を民主主義の道へと導こうとするならば、「専制性」を打ち破り、「民主性」を育てなければならないとデューイは考えた。この思想は彼の講演の出発点となった。

それに対して、キルパトリックは、デューイと全く異なった目的を持ち、デューイ訪中のときと全く異なった背景において中国を訪れたのである。

デューイは、二年間に渡る中国教育に対する直接的な指導のみならず、帰国後にも手紙などを通じて中国の教育を継続的に指導しながら、アメリカの国会を走り回って、アメリカに中国を援助させるように努力していた⁶⁾。デューイの呼びかけにより、当時のアメリカ教育界は、いかに中国を援助し、その豊富な天然資源、人力資源を開発し、それを世界の民主主義発展に役に立たせるかという共通の関心を持つようになった。多くの有名な教育研究者は、中国教育改革の指導者として、相次いで中国訪問を果たした。キルパトリックは、この背景において、中国の教育改革を指導する使命を負い、中国を訪問したのである。

それと同時に、中国においては、デューイ訪中講演の思想が全国に普及しつつあり、多くの小中学校はデューイが示したように子どもを学校、教室、教師から解放し、子どもの要求にしたがって学習を展開させる実験を行っていた。しかし、デューイが示した思想を中国の教育に定着させるのは、やはり簡単なことではなかった。「教育を現実生活に連結させよう」、「子どもの要求を尊重し、学習における子どもの能動性を発揮させよう」⁷⁾という二つの原理は、デューイにより大いに強調されたが、具体的な問題として、学校においてどのように利用するかについて、中国の教育者たちはとまどった。そのような実験は中国で前例がなかったからである。そこで、デューイの思想をうまく具体化する教育者が中国の教育改革を指導することが緊急の要望となった。デュー

イの理論の継承者と解釈者であり、デューイの教育原理を具体化したとされたキルパトリックは、この使命を果たす最も適当な人選となった。これが中華教育改進社がキルパトリックを要請した最も大きな理由と考えられる。したがって、キルパトリックは明確な目的、すなわち、デューイ訪中講演で提出した抽象的な教育原理を解釈し、その原理に基づく実験の具体的な操作方法を指導するという目的を持って訪中したのである。

民主主義教育の種を植え付けなければならないというデューイの問題意識と民主主義教育の実験にあった問題を解決するために方法を提示するというキルパトリックの問題意識との違いにより、彼らの中国教育に対する指導の方法、すなわち、訪中講演の視点も異なっていたことは明らかだろう。

2. デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の視点

デューイは、主に教育哲学の視点から民主主義教育の基本原則を伝授し、キルパトリックは、主に教育方法の視点から民主主義教育の具体的な操作方法を指導した。この相異点は、彼らの講演のタイトルからはっきり見ることができる。

デューイは、「社会哲学と政治学」、「教育哲学」、「思想の派別」、「現代の三人の哲学者」、「倫理講演紀略」、「実験倫理学」¹⁾などの教育哲学原理を中心とする講演を行ったのに対し、キルパトリックは、「文化の変化に適應する教育」、「学習における意志の影響」、「学習はいかに生活に適應するか」、「教師はいかに生徒を指導するか」、「生徒の能動力を養成する方法」²⁾などの教育方法の論題に基づいて講演を行った。二人の講演の視点の違いを裏付けるために、「いかに教材を組織するか」という問題についての二人の問題意識を比較してみよう。

この問題について、デューイは以下のように述べている。「教材の組織の問題は、どのような方法で教材を改進し具体化し、それをどのように子どもの能動性を促進させるものにするかということである。教材の組織を通じて養成する能動性の性格とは、活動の精神、創造の能力と発明の思想である。この能動的な性格は、学校で育てなければならない。中国教育は、従来の受動性を重んじる傾向を改め、能動性の養成に目を向けなければならない」³⁾。しかし、デューイは、教育改革の方向の提唱にとどまり、どのように活動、創造、発明の性格を教材の伝達を通じて養成するかについては、ほとんど具体化していなかった。

それに対してキルパトリックは、どのように教材を組

織するかをはっきり示した。「中国の子どもにとって最も必要な性格、すなわち、活動、創造、発明の養成において、最も重要な方法は、練習させるということである。ある教材を学習し終わってから、その内容に関する練習を行わなければならない。そうしなければ、その学習が無用なものになる。教師はできるだけ新しい環境を創設し、その新しい環境において子どもに新たな問題を探求させ、問題を解決させる。例えば、毎週一時間を子どもに与え、その一時間において、子ども自身にとっておもしろい課題を発見させ、自分の考えでその課題を解決する計画を立て、その課題を解決するよう試みさせる。教師は子どもの実践に助言し援助する。」そしてキルパトリックは、「この目的を達成する最も有効な方法はプロジェクト・メソッドなのだ」とはっきり示した⁴⁾。さらに、キルパトリックはプロジェクト・メソッド討論会を開き、プロジェクト・メソッドにおける知識の功利、子どもの興味と社会要求の関係、教師の目的と子どもの目的の一致性、グループ学習の方法などの問題について、中国教育者に詳細な指導を行った⁵⁾。

デューイとキルパトリック講演の視点の違いはどこにあるのだろうか。

まずデューイの講演に対する胡適の評価から見よう。「デューイの講演を聞いた教育者たちは、空中に浮いていた両足をついに着実な大地に踏ませ始めたように、中国の教育改革の指導的な思想を得ることができた。先生の講演で提出された精神は、十年、二十年、いや、永遠に中国の教育改革に輝くだろう」⁶⁾。胡適のこの話は一つの重要な示唆を示している。すなわち、当時の中国は、教育改革の具体的な方法ではなく、哲学的な原理を求めるためにデューイを要請したのである。この意味で、デューイの講演は、この使命を見事に果たしたと言えるだろう。そして、キルパトリックの講演は、まさにデューイ講演の不足を補うために行われた。デューイの講演は、キルパトリック講演の解釈によって具体化され、中国の大地で幅広く普及していくことができた。しかし、キルパトリックの通俗的な解釈は、デューイの原意と完全に一致するとは言えない。例えば、佐藤の研究(1990)によれば、「デューイの単元学習の様式が、概念形成や問題解決の思考過程を、帰納的演繹的思考過程或いは反省的思考の段階で想定し、その過程と相即的に教材と経験を構成する努力であったのに対し、キルパトリックの『プロジェクト・メソッド』は、性格と態度の形成を志向し、教材論を捨象して定式化された単元学習であった」といわれる⁷⁾。つまり佐藤によれば、キルパトリックにおいて、デューイの「学習」の知的社会的

性格を表現する「経験」は、反知性的道徳的な態度の形成を導く「目的的活動」へと置きかえられ、デューイの「探求」の中心をなす「反省的な思考」は、環境の刺激に対する直接的反応である「反射的活動」へとすり替えられていたという。佐藤の論述は、デューイの訪中講演に対するキルパトリックの解釈において検証されている。冒頭に述べたデューイ批判において指摘された「デューイの思想」は、実際にはデューイのものではなく、キルパトリックによって解釈され、変容したものであったのである。この問題については、後に教育と生活の関係において詳しく討論する。

3. デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の共通点と相違点

デューイ講演とキルパトリック講演の視点は異なったが、二人は共通な土台を踏まえて講演を展開したことも事実である。総体として見れば、デューイの講演とキルパトリックの講演は、以下の三点に示すような大きな枠組みにおいて共通している。第一に、中国の教育の改革は、まず知識観の変革から始めなければならない。第二に、新しい知識観の樹立に伴い、能動性の養成が要求され、この能動性は、明確な学習のステップを通じて展開される。そして第三に、学習における教師は従来と異なる役割を果たし、このような学習は従来と異なる学校で行われる。つまり、デューイとキルパトリックは共に、知識観、能動性と学習のステップ、教師の役割と学校の様式を中心に講演を展開していったのである。

デューイとキルパトリック講演の基調が共通していることは、デューイの思想を速やかに中国の教育現場で現実化することに対して非常に役に立った。しかしこのことは、デューイのものをキルパトリックのものと混同する原因になり、後の中国教育の発展に大きな影響を与えることになった。二人の講演の基調が共通していなければ、キルパトリックのものは、デューイのものともみなされなかったであろう。そうであるならば、新中国成立後のデューイ批判は行われなかったかもしれない。キルパトリック訪中は、中国におけるデューイ理論の運命ばかりか中国教育の運命さえも変えたと言っても過言ではないだろう。

上述したようにデューイとキルパトリックは、講演の基本的な枠組において共有する点を持っていたが、さらに詳細に検討するならば、講演の内容は異なる点も多い。中国教育に対する二人の問題意識の違い、さらに二人の教育思想の違いにより、同様な課題における訪中講演の具体的な内容は異なる色彩を表現したのである。

a. デューイとキルパトリック講演における新しい知識観の比較

デューイによれば、新しい知識観を強調する目的は、民主主義教育の推進における大きな障害物となる中国の伝統的な知識観を打破することである。中国の伝統的な知識観によれば、「学習の内容になる知識自身は完璧で、既成のものである。知識を求めることは、既成のものを得ることである。知識の伝授或いは伝承は非常に重要だと思われ、知識は金銭のように代々に伝えられ、知識を求める人は、守銭奴のように蓄えることを重んじ、使用することを無視する」¹⁵⁾。この知識観を見なおすために、彼は以下の観点を提唱した。「知識は完璧なものではなく、発展するものである。既成するものでもなく、創造するものである。蓄えるものでなく、使用するものである」¹⁶⁾。デューイの論述の重要なポイントは、デューイが知識の重要性を強調しており、知識の価値が創造され使用されることにありと主張していることである。

それでは、なぜデューイは、中国革命後に「子どもの育成における知識の重要性を無視する」と批判を受けることになったのか。その根本的な原因は、キルパトリックの講演における知識観に対する説明にあった。

キルパトリックは、デューイの知識観をさらに「固定の知識が重要ではなく、教科書の知識だけ学ぶのが遅れている」と解釈し、「知識は絶えず変化しており、固定の知識によって永久に変わらない教育内容を定めるのは不可能だ……固定の知識だけを重視する教育は遅れている」と彼は述べ、さらに、「学校において、固定された知識、特に教科書の知識だけを学ぶという考えが落伍しており、固定された知識しか学ばない子どもたちは、その特定な知識で変化している環境に生み出された新たな問題を解決できなければ、世界に淘汰されることになる」と言う¹⁷⁾。すなわち、教科書の知識を重視するのではなく、環境の変化に応じる態度や能力の養成に傾いたことが、キルパトリックの知識観のポイントと見ることが出来る。

つまり、後のデューイ批判において、「デューイは知識を無視し、現実生活での断片的なものでしか重んじない」¹⁸⁾と指摘されたものは、デューイの本来の主張ではなかった。教科書の知識を軽視することを示したのは、デューイではなく、キルパトリックだったのである。しかし中国の教育者は、キルパトリックの解釈をデューイの本来の主張と誤解し、キルパトリックの論点をデューイのものと混同したのであった。

b. 子どもの能動性理論に関する比較

デューイもキルパトリックも、子どもが受動的に固定の知識を受け取ることに強く反対し、子どもの学習能動性を強調した。しかしデューイが、子どもの学習過程への参加を強調するのに対し、キルパトリックは学習における子どもの「独立性」を強調したのである。

デューイによれば、「中国の教授法は、民主主義精神を欠いたものであり、教師が一方的にしゃべるだけである。教育における行動は、教師の詰め込みと生徒の聴講だけであり、子どもの能動的な参加は全くない」。能動的な参加こそ民主主義教育の特徴であり、子どもの能動的な参加がない教育は、民主主義教育とは言えないと考えたデューイは、「子どもの能動的な参加は中国民主主義教育の根本である」と語り、「能動的な参加こそ、活動、創造、発明の性格を養成する鍵である」と述べた²¹⁾。そして、この能動的な参加の過程、すなわち、学習の過程とは、観察、計画、実験、取捨というステップを経過して行われるとデューイは語った。

それに対して、キルパトリックが強調したのは、子どもの学習の「独立性」である。キルパトリックによれば、「中国の学校はある大きな過ちを犯した。それは人生の要求に満足できない教科書の知識だけを子どもに教えるということである。その上、教師は代行することが多く、子どもが自発的に学習する機会が少ない。これは私が最も反対していることである」。これはキルパトリックが主張した新たな環境に適用する態度や能力を養成する思想を反映している観点である。すなわち、独立でなければ、新しい環境に応用する性格が育てられないことである。それゆえ、「独立した思想で新問題を解決するのは中国教育改革の任務だ」と彼は語った²²⁾。そして、この独立する学習の過程は、動機、困難、研究、実験、解決という五段階で構成されているとキルパトリックは強調した。

c. 教師の役割について

訪中講演の論述に限って見れば、教師の役割という問題において、デューイとキルパトリックは以下の共通な思想を持っている。教師は従来のように「知人」として固定の知識を子どもに一方的に詰め込むのではなく、子どもの学習の共感者として子どもの学習を援助し、子どものできるころまで導いていく。子どもは従来のように「無知」として教師が与える知識を受動的に受け入れるのではなく、教師の指導と自身の要求によって、教師と共に未知の世界を探求していく。このような学習において、子どもは主役、教師は脇役になるのである。

彼らが異なるのは、まずデューイが、教師が子どもの学習の「案内人」²³⁾と強調し、キルパトリックは、教師が子どもの学習の指導者²⁴⁾と強調する点にある。「案内人」ならば、子どもの学習のたびの先頭に立たなければならない。すなわち、子どもの学習は教師の案内に沿って行くことである。一方で「指導者」ならば、子どものそばに立ち、子どもの意志による学習の展開に助言しサポートするのである。後の教育改革、例えば陳鶴琴の教育実験で起こった「学習の自由化」や「学習の任意性」などの問題は、キルパトリックの「指導者」の観点の影響を受け入れたと考えられる。

4. 教育と生活の関係に関する論述の違い

デューイ訪中講演とキルパトリック訪中講演の違いは、教育と生活の関係に関する論述においてははっきりと表れている。冒頭に述べたように、1927年のキルパトリック訪中後、中国教育界では「教育即生活」という言説は、デューイの主張と見なされ、そしてスローガンになって全国に普及していった。「デューイが『教育即生活』のスローガンを提出してから、中国の教育方法論は明確になった。このスローガンは二十年にわたって、中国の教育に大きな影響を与え、教育者たちはそれを教育の詔としている。これは教育即生活の正確性を証明する絶好な証拠である」²⁵⁾。

しかし、筆者の調べによれば、デューイ訪中講演の原稿では、「教育即生活」という言説はどこにも書かれていないのに対し、キルパトリック訪中講演の原稿では、「教育即生活」という言い方は多く残されている。例えば、キルパトリックは「教育即生活である。生活のあらゆる部分は教育において対応することができる場所がある。そして、すべての社会問題の解決は教育の方法を使わなければならない」と述べている²⁶⁾。つまり、「教育即生活」という言説は、デューイではなく、キルパトリックが中国に提出したものであったが、中国の教育者は、キルパトリックの主張をデューイの主張であると誤って誤解したと考えられる。

もちろん、デューイは訪中講演において、教育と生活の関係について全く触れていないのではない。むしろ、教育と生活の関係の理論は、デューイ訪中講演の重要思想であった。しかし、デューイが主張したのは、「教育は生活につなげなければならない」ということであり、「教育即生活」ではなかったのである。

一見するならば、この二つの言い方は大差がほとんどないように見えるのだが、後述するように、実際には、この二つの言い方は異なる意味を内包している。

それでは、デューイが提唱した「教育は生活につながなければならない」という思想は、キルパトリックが提唱した「教育即生活」の思想とどのように相異しているのか。

この問題を討論する前に、一つ的前提をはっきりさせておこう。デューイの「教育は生活につながなければならない」という思想であれ、キルパトリックの「教育即生活」の思想であれ、1920年代の中国教育に向けて提出したものだということである。以下検討するデューイとキルパトリックの思想は、いずれもこの時間性と空間性の上に成り立つ議論であることに注意しなければならない。

まず、デューイとキルパトリックが前提とした「教育」という言葉の意味の違いを明確にしよう。

訪中講演でデューイが指した「教育」とは、一般の学校教育であり、キルパトリックが指した「教育」とは、都会の学校教育と異なる農村教育のことである。この点が、教育と生活の関係に関する論述における二人の最も大きな相違点である。

1919年5月に中国を訪れたデューイが見た中国の教育は、貴族教育を中心とした少数の人しか受けられない教育であった。どのようにして教育の機会を均等化して、多くの民衆に教育を受ける機会を与えるかは、当時の中国教育が直面した緊急な課題であった。民主主義教育の観念を樹立するならば、貴族教育が中国教育を支配していた局面を打破しなければならないとデューイは考え、講演の矛先を貴族教育にまっすぐに向けたのである。「中国の学校は、少数の人のために作られたものであり、階級を分ける基準になっている。学校での教育は、この少数の人を多芸多才な人にならせる装飾品であり、社会生活とかけ離れた関係のない存在である」²⁵⁾。このような教育は「社会生活を知らず本の虫しか育てられない」とデューイは批判した。この状況を背景に、中国の多くの民衆に受けさせる教育、しかも、社会に有用な教育、それは「社会生活につながなければならない教育である」²⁶⁾とデューイは述べた。デューイが使った「教育」の意味は、当時の中国にとって必要な一般教育の理念であった。

それに対して、1927年7月に中国を訪問したキルパトリックが見た中国の教育は、民衆に対する教育、特に85%の中国人口を占めた農民に対する農村教育を勢いよく展開していた最中であった。しかし、中国の教育者は、具体的にどのように農村教育を展開していくかに関して明確な指針を持たずにいた。多くの人々は、貴族教育の学校と同じように農村学校のカリキュラムをつくり、都会

の学校での教育方法にしたがって農村で授業を展開していた。その結果、学ぶ側の要求と教える側の意図は異なり、よい効果を得ることができなかった。この背景において、キルパトリックは中国の農村教育に向けて、「教育即生活」を提出したのである。「中国人口の85%以上は農村にあるため、農村教育を重視しなければならない。しかし、中国の農民たちにとっては、本の知識を学ぶというよりも、自らの家庭、現実の生活を理解する方が重要だと考えている。このため、現在のカリキュラムにおける多くの科目、例えば、代数、幾何、論理学などは、進学を目的としない農村の人にとっては、全く無用のものである。今の教育制度に従って農村学校を作れば、彼らは無用だと分かってこの無用なものを学ばなければならないことになる」とキルパトリックは指摘し、「中国の教育を改革しようとするれば、まずこの思想を放棄しなければならない」と強調した²⁷⁾。そして、彼は中国が求めるべく農村教育を以下のように提示した。「中国の現実生活、すなわち、生活は第一、書物は必要のときだけを使うということに適用する学校は『教育即生活』の学校である。生活は第一、読み書きは第二である」²⁸⁾。さらに、彼は、「中国の教育者の責任は『教育即生活』という原理を中国で現実化することだ」と中国の教育者に呼びかけた²⁹⁾。

要するに、デューイは、教科書の知識を否定しておらず、その上、教科書の知識の重要性を強調していた。もちろん、彼は従来のように教科書の知識を一方的に子どもの頭に詰め込むという教育方法に反対していた。つまり、デューイは、教科書そのものを否定していたのではなく、教科書の使用方法を問題にしたのである。これは後に中国の教育者に「教科書を反対する」と誤解された点である。それに対して、キルパトリックは、現実生活の内容を重んじ、教科書の知識を軽視する考えをはっきりと示した。キルパトリックがデューイの継承者であり解釈者であると思われたため、教育と生活の連結における教科書の役割を抽出したキルパトリックのこの観点は、デューイの思想とみなされ、中国の教育に大きな影響を与えたのである。例えば、彼の教え子陳鶴琴は、真っ先にこの呼びかけに応じ、幼児教育と初等教育において「教科書を廃止し、現実生活を教科書とする」実験を行い、さらに、キルパトリックの「生活は第一、教科書は第二」という思想に基づき、「大自然大社会は学習の『主工具』であり、教科書は学習の『副工具』である」と主張し、カリキュラムをつくった³⁰⁾。しかし、陳はこのキルパトリックから学んだ思想を「デューイの思想を受容した結果」と語っていたのである³¹⁾。

このように、中国の教育者は、キルパトリックの主張をデューイの主張と混同し、キルパトリックが指した「農村教育」とデューイが指した都会の「一般教育」における教育理念を同一視したのである。

それでは、デューイとキルパトリックが使った「生活」とは、どのような意味を持っているだろうか。まず、デューイもキルパトリックも「生活」が「現在の生活」と「未来の生活」を含んでいると示している。デューイは、学校をどのような社会生活につなげさせるかを論述するとき、現存の社会生活だけでなく、「過去、現在、未来の社会生活」、特に「社会の最高モデル、すなわち、未来の民主主義社会の生活」につなげさせると強調した³²⁾。そして、キルパトリックは「現在の学校生活を校外さらに卒業後の子どもの人生に適用させようとするれば、学校の生活を実際の生活に接近させるしか方法がない」と述べている。ここで示した「実際の生活」とは、「人生の最も優れている部分を代表することができるものである。普通の現実生活ではない。すなわち、学校生活に現実生活を取り入れるときに、次世代(next generation)の要求を基準としなければならない」³³⁾と考えられるものだった。

教育を生活に連結させる目的について、デューイとキルパトリックの考えは異なっている。デューイは、現在の生活において、未来生活の知識と能力を子どもに教え、未来の生活のレベルによって、現在の生活を改造し、将来を創造することを目指している。すなわち、現在の生活を通じて未来生活を主体を形成するのである。それに対して、キルパトリックは、現在の生活の知識と技能を子どもに与え、現在の大人の生活に適應させると考えていた。すなわち、彼は現在の生活で現在の生活に適應する主体を形成し、実生活での主体経験の積み重ねにより、主体が自然に次の世代へと転換させることを重んじていた。キルパトリックはこう述べている。「いわゆる教育即生活ということの意味は、一方、子どもに現在の生活を満足させ、他方、将来の生活を準備させるということである。例えば、今年子どもの生活経験を増加させれば、来年の子どもの生活は自然に今年より完全になるはずだ。このように類推すれば、子どもは年齢が増せば増すほど、彼が将来の生活を準備する能力も強くなるはずだ。この意味で、現在の生活は将来の準備とも言えるのだ」³⁴⁾。この考えは中国の現実に向けられていた。現実の生活を学校の教育内容とし、それを学ぶことを通じて、子どもに現実の生活に適應する方法を伝える。そして、現実の生活の内容を学んだ子どもは、学校を離れた後すぐに現実の生活に慣れることができ、現実社会で

順序に生活することができる。これはまさに当時の中国にとって緊急な問題であり、現状とかけ離れた理想の教育思想ではなかった。しかし、当時の中国の教育者には、キルパトリックが中国の現状に対して必要と考えたことがデューイの思想と異なっていたことは考えられなかったのである。

さらに、「教育を現実生活につなげる」ことであれ、「教育即生活」であれ、現実生活を教育に組み込むときに、どのような基準に合わせて行うかを考えなければならない。デューイは、社会環境の要求と子どもの心理にしたがって教育内容を決定するという観点を明確に中国教育者に示した。すなわち、学習の主体と客体の要求を同時に考える方針である。それに対して、キルパトリックは、子どもの意志を尊重し教材を選択するという主張を表した。

キルパトリックはが上述したような理論を提示した背景には、中国が「教育即生活」のような教育を成功させることができるという彼の信念があった。まず、この新しい教育を実現するのに中国は有利な条件を持っていると彼は思った。「中国は欧米と異なり、ブルジョア教育を採用して二十年しかたっていないため、種種の不良な習慣にはまだ染まっておらず、改革しやすい」。さらに、中国ではすでに「教育即生活」のような素晴らしい学校が存在しているとキルパトリックは語った。キルパトリックは暁荘師範付属小学校を視察した後、暁荘師範が通常の学科と教科書を完全に廃止したこと、児童の自覚による目的性のある、計画的な学習をしきりに褒め称えた。「中国は素晴らしい農村学校を作り出した。陶行知が創設した暁荘師範学校は世界においても例を見ない優れた学校である。この学校は私の思想と非常に合っている。……私はずっとこのような実験学校、このような科学的な理論にしたがって行った実験を探していた。今、やっと中国で見つけた。暁荘師範の実施方針と方法、発足するときの理想、進展の過程などは、すべて私の基準に一致している」と彼は語った³⁵⁾。

もちろん、キルパトリックが当時の中国の農村教育に提出した「教育即生活」の積極的な意味も否定することはできないだろう。「教育即生活」という言説は、実は、異なる二つの意味で理解することができる。一つは、教育が現実生活よりレベル高い現実生活の抽象、総括、集結であるという考えの上に成り立っているである。この考えを前提とするなら、教育は生活と等しくされるために、教育の水準を降下することになり、教育の意味そのものを矮小化したという結論が出されるのだ。もう一つの意味は、生活の水準を向上し、教育のレベル

に合わせるという考えの上に成り立っている。キルパトリックが当時の中国に向けて提唱した「教育即生活」の意味は、教育のレベルを降下させるという意味ではなく、生活のレベルを向上させるという意味であった。当時の中国人口の85%は文盲であり、いかに生活するかすらわからなかった。中国を改造するためには彼らの改造から始めなければならない。彼らに最低限の読み書きの知識を与えるために作られた学校は、彼らの生活を向上する「教育即生活」のような学校である。したがって、教育を受けられない状態から教育を受けることができる状態へ、無知な生活から知的な生活へと中国の国民の資質を転換する意味において、「教育即生活」の提唱は、当時の中国の国家改造にとって根拠のあることだったのである。

終わりに

この論文で解明したのは以下の三点である。

まず第一に、デューイとキルパトリックは、共通な土台を踏まえながらも異なる内容の講演を行ったことである。二人の講演の共通点は当時の中国教育者に強調され拡大されたのに対し、相違点は無視され抹殺されてしまった。その結果、デューイとキルパトリックは同一視され、キルパトリックのものはデューイのものと混同されることになった。1920年代から1940年代までの中国教育が、デューイの思想に支配されていたことは事実であり、デューイは理論的な側面で中国の教育に影響を与えていたが、実際の教育技術においてはほとんど論及していなかった。デューイの思想の具体的な解釈者と推進者の役割を演じたのは、キルパトリックである。しかし、キルパトリックの指導によって、中国教育はデューイの真意と異なる方向へと歪んで発展していったのである。

第二に、「教育即生活」というスローガンは、デューイが提出したものではなく、キルパトリックが提唱したものだということである。デューイの「教育は生活にならなければならない」という主張はキルパトリックの「教育即生活」と混同された。その後の1920年代から1940年代までの中国の学校では、知識の獲得が軽視される傾向がもたらされた。1949年以後は、「教育即生活」という主張が学校教育を矮小化する主要な論点と見なされ、デューイは激しく糾弾されることになったのである。

第三に、二人が中国で語った教育と生活の関係理論は、それぞれ異なる当時の中国教育の実情に合わせて作られたものだという点である。すなわち、その理論は時

間的と空間的な限定性があり、中国でしか使えないと考えられる。中国教育の特殊性を持つ理論を普遍化することができない。中国教育という特定の空間、そして1920年代という特定の時間を超越し、それをどこの国でも、いつの時代でも普遍性を持つ理論と普遍化し拡大化するならば、間違いなく、デューイとキルパトリックの理論に対する誤解を招くことになる。

(指導教官 佐藤学教授)

注

- 1) 曹孚 (1955) 「実験主義教育学批判」, 『人民教育』, 1955年5月号, pp. 3~25。
- 2) キルパトリック (1929) 「暁荘師範に対する私の感想」, 『暁荘批判』, 上海児童書局, p. 87。
- 3) キルパトリック訪中講演 (1927) 「中国目前の教育問題」, 『教育雑誌』第19巻第12号, pp. 3~5。
- 4) 李春 (1997) 「デューイ訪中講演に関する一考察」, 『アジア教育史研究』第6号, pp. 16~26。
- 5) デューイ訪中講演 (1920) 「民主主義の要諦」, 『民国日報』1920年6月26日。
- 6) 胡適 (1921) 「デューイ先生と中国」, 『東方雑誌』第18巻第13号, pp. 12~13。
- 7) 李春, 前掲文 (1997)。
- 8) 晨報社 (1922) 『デューイ五大講演集』, 晨報社, 1922年。
- 9) キルパトリック訪中講演 (1927) 『教育雑誌』第19巻~20巻。
- 10) デューイ訪中講演 (1920) 「教材の組織」, 『民国日報』1920年7月1日。
- 11) キルパトリック訪中講演 (1927) 「子どもの能動力を養成する方法」, 『教育雑誌』第19巻第6号, pp. 12~14。
- 12) キルパトリック訪中講演 (1927) 「中国問題討論会」, 『教育雑誌』第19巻第10号, pp. 12~16。
- 13) 胡適 (1921) 「デューイ先生と中国」, 前掲文。
- 14) 佐藤学 (1990) 『米国カリキュラム改造し研究』, 東京大学出版会, pp. 123~124。
- 15) デューイ訪中講演 (1919) 「現代教育の趨勢」, 『北京大学日刊』1919年6月27日。
- 16) 同上。
- 17) キルパトリック訪中講演 (1927) 「文化の変化に応じる教育」, 『教育雑誌』第19巻第10号, pp. 1~5。
- 18) 曹孚, 前掲文 (1955)。
- 19) デューイ訪中講演 (1920) 「自動の真義」, 『民国日報』1920年5月25日。
- 20) キルパトリック訪中講演 (1927) 「子どもの能動力を養成する方法」, 『教育雑誌』第19巻第6号。
- 21) デューイ訪中講演 (1920) 「教師職業の現在機会」, 『民国日報』1920年5月30日。
- 22) キルパトリック訪中講演 (1927) 「教師はいかに生徒を指導するか」, 『教育雑誌』第19巻第6号, pp. 12~14。
- 23) 張天麟 (1941) 「教育即生活の新釈」, 『教育雑誌』第33巻第3号, pp. 25~26。
- 24) キルパトリック訪中講演 「中国目前の教育問題」, 前掲文。
- 25) デューイ訪中講演 (1920) 「専門教育の社会観」, 『民国日報』, 1920年6月8日。
- 26) 同上。
- 27) キルパトリック訪中講演 (1927) 「中国の教育問題」, 前掲文。

- 28) 同上。
- 29) 同上。
- 30) 陳鶴琴 (1940) 「幼稚園の課程」, 『陳鶴琴全集』第二卷, 江蘇教育出版社, 1992年, p. 149。
- 31) 陳鶴琴 (1941) 「活教育と死教育」, 『活教育』第一卷2号, pp. 37~45。
- 32) デューイ訪中講演 (1919) 「現代教育の趨勢」, 前掲文。
- 33) キルパトリック訪中講演 (1927) 「中国にとって必要な教育原則」, 『教育雑誌』第19巻第9号, pp. 16~20。
- 34) 同上。
- 35) キルパトリック (1929) 「暁荘師範に対する私の感想」, 前掲文。